

## いわゆる『儒醫』についての考察——Ⅱ 儒葬

田中 祐尾

大阪市立大学医学部

儒教における取分け大切な作法が葬礼である。家長の死は肉体から魂への連続性とその招魂再生への手続きの機会でもあった。一家の継続は一族の繋がりを、一族の繋がりは君主ひいては封建治世の安泰を意味した。彌性園八代田中元緝(モトツグ)が寛政八年(1796)に家宗を儒教に改めて父元允(モトノブ)の死を儒葬で祀る経緯については浅見綱斎の『家禮』を教科書とし、更に細目については同じく綱斎の『喪祭小記』、更に中村惕斎『追遠疎節』、三宅尚斎『祭祀来格説』、荻生徂徠『喪禮略』などに求めた。儒教の世界は階級社会であり尚且つ本家中国(当時は明・清王朝)のしきたりが我が国に其の儘もたらされるには無理があった。朱子学の流れを受け継いだ『家禮』の図解や説明を見ても、それは飽く迄儒学の教養と財力労働力が豊富な支配階級にして可能な作業の数々である。地方の郷土といった階級にすぎない田中家に儒式の葬祀がどのように受け容れられたかは、現存する『喪祭私記』にその次第が、六代に亘る二十の墓がその証拠を物語っている。医師の家系だから当主の死に様は概ね予想が可能であった。屍体の清拭、納棺、密閉、葬礼そして土葬といった一連の作業も条件を整えば順調であった。儒喪の絶対条件である土葬には屍体の平穏さが必須であった。江戸期に長崎から度々襲来した天然痘やコレラといった伝染病の蔓延。村の人口が半減するといったパンデミック期の複数死にはどう対処したのか。人々は死体から遠ざかり寺院の墓地も埋葬を拒否した。仕方なく火葬にしようと試みるが多くの人を焼く薪が足りず、集落から遠く離れた荒地に大きな穴を掘って集団埋葬した。今では街並みに飲み込まれているところが多いが、地方へ旅すると、寺院から無縁の林の陰などにひっそりと佇む墓地が散在するのが車窓から見受けられるのがこのような江戸期の集団土葬の名残である。では儒者たちはどのように死を迎えたのか。大切な儒喪の前に死を悟った当主と最も近い家族は、できる限りの美しい亡骸を目指して死を目指すのである。今でいう尊厳死である。仏教においても即身成仏といった一種の断食療法がある。儒教におけるそれはさほど凄まじい精進を必要とせず、ひいては教義による日常の覚悟こそが必要であった。魂の抜け殻はひたすら神々しく整っていなければ行く末に魂を呼び戻すことが叶わなかった。桂皮・甘草・丁香・棗・辛子といった防腐剤・芳香剤が棺に満たされ、隙間は松脂で閉じられた。輪廻転生の思想は無いから死体の掘り起しは想定されず、肉体は土に還るのが宗則で墓石は目印に過ぎない。江戸期の著名な儒者たちの墓を見ると、例えば京都の禅寺の一隅にある伊藤仁斎一族の墓地は僅かに墓碑の形と記銘法が儒式であって、仏教の墓地と見分けがつかない。鎌倉期に朱子学を明国から運んだのが禅僧だった。以来日本に儒教の墓寺は無く、湯島聖堂は孔子とその弟子たちの神主(シンシュ)を祀る廟のみがある。田中彌性園七代の墓は創設時周りに殆ど仏墓のない山寺であった。先ず土葬による埋葬が数年の後、目印に巨石を置いた。以後代々もこれに倣った。明治に至り数が増えて「祐順之墓」といった表記の墓石となった。昭和となり周囲が仏墓で埋まり、その山腹に平民の儒墓群としてきわめて異様な光景を呈す。以上の事実を可能な限り映像で示す。